

# 宮島ホテルの記録

## —昭和 18 年 (1943 年) の記憶—

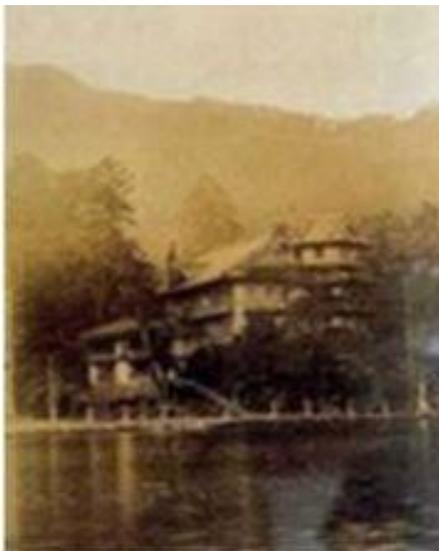
原子爆弾投下一年前の宮島の戦時中の話である。

2013 年 (平成 25 年) 8 月 18 日、朝日新聞朝刊に掲載された記事により、戦争と無縁な平和な宮島であったと勘違いしていたことを改めて思い知らされたのである (親から一切聞いたことがない)。

あのドイツの U ボートが宮島に来ていたという衝撃の記録である。

### 「宮島ホテル」の火災

原爆ドーム (かつての広島産業奨励館) を設計したチェコの建築家ヤン・レットルが設計し、大正 6 年 (1917) に落成した宮島ホテルは、宮島観光を楽しむ外国人専用のホテルとして利用された。



戦後、昭和 20 年 (1945) 以後は連合軍に接収されて保養施設となっていたが、昭和 27 年 (1952) 8 月 27 日に焼失した。

当時、現在の廿日市警察署 宮島交番あたりの海岸に波止があり、そこで西の松原の向こうに、火の手が上がり、子ども心に火の怖さを初めて知ったことを覚えている。

大元神社の手前の海際に建つ在りし日の宮島ホテル。

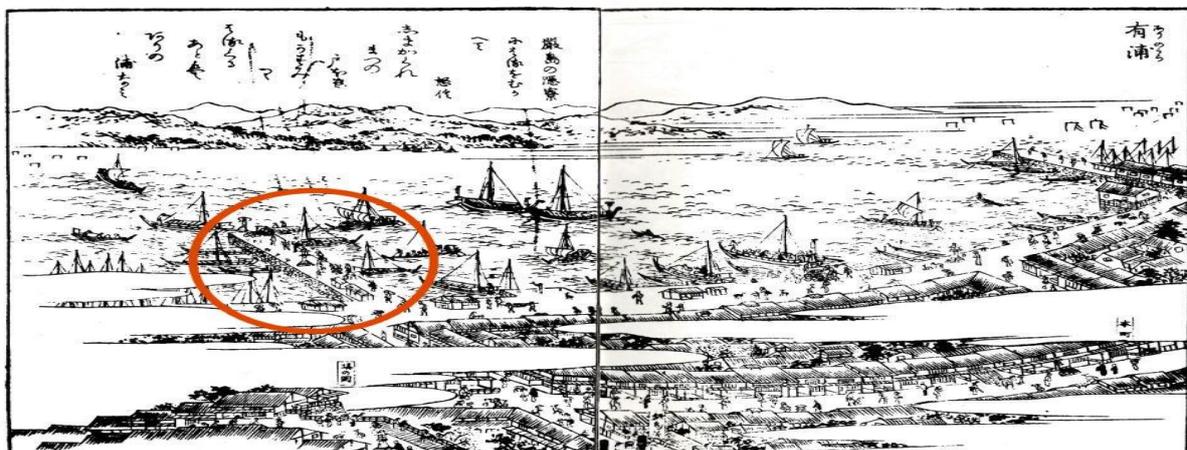
現在この地に国民宿舎「杜の宿 (もりのやど)」が建っている。

【参考 Web】<https://oirushock.exblog.jp/15475373/>

嚴島園會 二

嚴島園會 二

絵 図 27



# 滞日元兵士ら親睦会

## 「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

1

宮島・厳島神社近くにあった宮島ホテル(1952年に焼失)は、広島市の県物産陳列館(後の原爆ドーム)を手がけたチエコ人ヤン・レルルが設計した。利用客は外国人が多く、戦時中の43(昭和18)年夏、「極秘任務」で来日したドイツ海軍兵のグループが1カ月余り宿泊した。

フランス西部のドイツ潜水艦基地・ロリアンから呉市の呉港まで約3万キロ。日本に譲渡する新鋭の潜水艦「U511号」(フリッツ・シュネーヴァイント艦長)を3カ月がかりで回航した乗組員たちだった。

乗組員は宮島ホテルから毎朝、隊列を組んで棧橋まで行進。船で大竹町(現・大竹市)にあった海軍潜水学校などに行き、日本側に操艦方法を指導した。

宮島で過ごしたUボート(ドイツ潜水艦)の乗組員はその後どこへ向かったのか。当時、同艦に便乗して帰国

### 帰国した乗組員



したドイツ駐在の海軍代表委員で、後に呉鎮守府司令長官を務めた野村直邦さん(73年死去)は著書「潜水艦U・511号の運命」にこう記している。

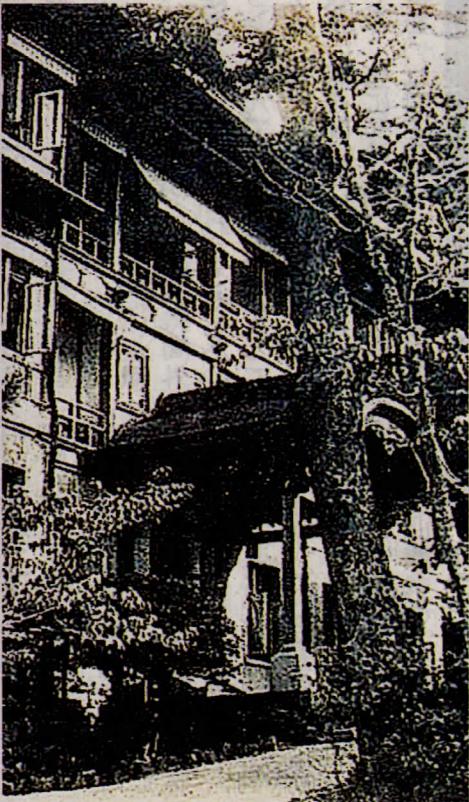
「乗員は、インド洋方面に進出して日本海軍と協同作戦にあたるドイツ潜水艦部隊の乗員補充にあてられ、かわるがわるインド洋方面の作戦に従事して、終戦になるまで奮闘をつづけていた」

日独間の輸送作戦などにあつた潜水艦を取り上げた作家吉村昭の著書「深海の使者」にはこうある。

「インド洋方面のドイツ潜水艦部隊の補充要員にあつたれ、シュネーヴァイント大尉も潜水艦長に任命されたが、米軍の沖縄上陸が開始された頃、ジャワ海で全員戦死した」

防衛研究所(現・防衛省防衛研究所)が編纂した「戦史叢書」には詳しい記述がなく、ドイツ人乗組員の行方は「全員死亡説」も含めはっきりしなかった。

ドイツ北部の町クックスハーフェンにある「Uボートミュージアム」(潜水艦資料館)。元潜水艦乗組員のホルスト・ブレドウ館長に問い合わせると、意外な答えが返つ



1943年夏、U511号の乗組員が宿泊した宮島ホテル

## 高齢化 2007年が最後に

「全員戦死」というのは間違っている。U511の元乗組員は戦後、この町でも会合を開いていた。だが、かなり前からそれもなくなったと聞いている」

オスターフェルトさんは日独の潜水艦基地があつたマレー半島のペナンで海軍の通信施設に勤め、気象図の作製にかかわつた。ドイツ敗戦後は神戸・六甲山のホテルに収容され、占領下の47年に帰国した。



2005年秋、ドルトムント近くの町で開かれた「ニッポン・クルー」の会合。中央右がウィルヘルム・オスターフェルトさん



カーラ・オスターフェルトさん

たばこの自動販売機や楽器の製造会社を退職した80年代半ば、戦時中に日本に滞在した旧海軍兵士らを捜し、親睦会「ニッポン・クルー」を立ち上げた。集いは年1回、港町のプレーマーハーフェンなどドイツ各地で開催。会員の高齢化が進み、2007年が最後の会合になったという。

毎年、夏と冬のほぼ2回、メンバーの近況を伝える会報が発行されていた。そのリストに、U511の元乗組員も含まれていた。

戦時中、呉港にひそかに回航した潜水艦を昨夏、連載「ヒトラーの『贈り物』」—Uボートの記憶—で紹介した。取材で気にかつたのが、ドイツ人乗組員の後だった。今年6月下旬から7月にかけて、ドイツなどで調査した結果を報告する。

(連載は全8回で、中川正美が担当します)

「会合」を手がかりに、ドイツで調査を始めた。集いは「ニッポン・クルー」と呼ばれ、世話役はウィルヘルム・オスターフェルトさんと分かつた。

クックスハーフェンの南約

# 91歳 片言の日本語で

## 「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

2

### 生き証人

欧州の金融センターであるドイツ・フランクフルトから北西に約60キロ。古い町並みを抜け、谷間の集落ガッケンバッハ・ディースで「ドイツ潜水艦（Uボート）の元乗組員」について尋ねると、所在はすぐに分かった。70人ほどの地区でUボートのおじいさんは有名だった。

エミール・ワグナーさん、91歳。大聖堂で知られる古都・ケルンの出身で、もともと瓦職人だった。1940（昭和15）年から軍事教育を受け、20歳で潜水艦乗りにな



った。

「背もあまり大きくなく、太つてもいない。肺が丈夫だというので、潜水艦要員に抜擢された」

42（同17）年、新鋭艦「U511号」に配属。翌夏、大西洋を南下し、アフリ

日本で買ったアルバムを手に、Uボートで極秘回航した様子を話すエミール・ワグナーさん（ドイツのガッケンバッハ・ディース）



1943年9月に呉港で行われたU511号の譲渡式

カ南端の喜望峯からインド洋に抜け、呉港まで航海した。上等水兵で、厨房を担当。回航当時の乗組員で「生き証人」は1人だけという。

「ニッポン、トモダチ」。

片言の日本語をまじえ、ワグナーさんは日本を拠点に過ごした4年間の日々を振り返った。

出港の数週間前、フリッツ・シュネーヴィント艦長から海図を取りに行くよう命じられた。アジア方面の図面で、行き先は口止めされた。

起爆剤や軍艦の塗料に使われる水銀が船底に大量に積み込まれた。乗客者の居住空間

## アルバムに交流の記録

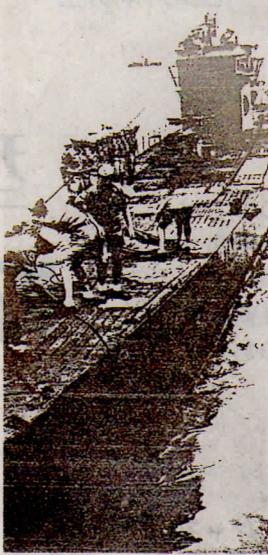
一部撤去された。

乗組員は艦長以下47人。ドイツ駐在の海軍代表委員だった野村直邦さん（73年死去）と付き添いの軍医杉田保さん（79年死去）も便乗していた。

厨房担当になった理由は「ケルン地方の人は陽気な性格で、気配りがうまいからだ」と笑って言った。

「厨房の隣が日本人の居室だった。潜水艦には米も積み込まれ、指で水加減を量って炊く方法を2人に教えてもらった」

U511は日本に譲渡するのが目的で、敵側の商船などを攻撃する通商破壊戦は主要任務ではなかった。だが、戦史記録を調べると、同艦はインド洋で2隻の輸送船を撃沈している。



「独の潜水艦基地があったマレー半島のペナンに到着したのは43年7月16日。便乗者を降ろし、同8月7日、呉港に到着した。」

「チョット、マッテクダサイ」。ワグナーさんは日本語で言うと、1冊のアルバムを手に戻った。表紙には旧日本海軍の艦隊が描かれている。中に80枚余りの写真が貼ってあった。江田島の水泳キヤンプ、温泉地の大分・別府めぐり、富士山見物……。回航当時の日独兵士の交流を記録したものだ。

「宮島にあった宿舎のホテルから棧橋まで行進曲を歌いながら歩いた。お返しにと地元的女性たちから招待を受け、和室で三味線の演奏を聴いた」

乗組員は宮島から船で近くの海軍潜水学校や呉港を往復し、9月中旬まで日本側にUボートの操艦方法を指導した。

ワグナーさんは出港前、日本について「同盟国だが、あまり知らなかった」という。

「外国に行くなら、その国の言葉の習得が必要だ。呉までの航海中、1日10単語ずつ日本語を覚えた。好奇心が、長生きの秘訣だ」

U511号 1941年末に建造されたドイツの中型潜水艦。水中排水量約1200トン。通商破壊戦を進めるため、ヒトラー総統が同盟国・日本に贈った。47人の乗組員と日独の海軍関係者や技術者ら8人を乗せ、43年5月にフランス西部のロリアンを出港。マレー半島のペナンを経由して同8月、呉港に到着した。日本側は「さつき1号」の秘匿名で呼び合ったが、同9月の譲渡後は「呂号第500潜水艦」と命名。当時の日本の技術水準では量産できず、海軍潜水学校の練習艦となって戦後、日本海に沈められた。